

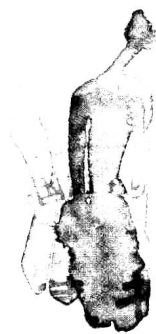
柴田 翔

立ち盡す明日



立ち盡す明日

柴田 翔



新潮社版

立ち盡す明日

一九七一年四月二十五日 発行
一九七一年七月十五日 六刷

著者 柴田翔

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社新潮社

郵便番号 一六二

東京都新宿区矢来町七一

電話 東京(03)二六〇一二二

振替 東京八〇八

二光印刷 製本 新宿・加藤

定価 四三〇円



© 1971 Shô Shibata
Printed in Japan.

乱丁・落丁本はお取替えします

立ち盡す明日・目次

第 四 章	第 三 章	第 二 章	第 一 章	序 章
⋮	⋮	⋮	⋮	⋮
138	99	57	14	7

裝
幀
朝
倉
響
子

立ち盡す明日

序章

日曜日は、午後になって久し振りに雨が上り、坐っていても、やや肌が汗ばんでくる陽気になった。漸く濃く繁くなった低い庭木の緑の連なりは、湿気をいっぱいを含んだ軟らかくゆるぐような大気のなかで、半ばはそれへ溶け込みながらも、なお、動物のような生々しさで、地にうずくまっていた。

少し遅くなった昼食を済ませ、庭に面した明るい台所兼居間の椅子に坐っていた佐室孝策は、雨の上るのを待ちかねたようにポロシャツを脱ぎ捨て、下着のシャツだけになり、ゴム草履を突っかけて家の裏の物置にまわった。暗い、ひんやりする物置の右の片隅には、ここ二年余り使い慣れたシャベルがある。彼はそれを取って、また庭へまわった。

見上げると、梅雨晴れの六月の空は青の輝きであった。ああ日曜日だなという思いが、孝策

の全身にゆっくりと拡がった。たまの休みの日、こうして自分の家の庭に立ち、ゴム草履の足に湿った土を感じることは、なんとよいことだろう。彼は、空をふりあおいだまま、大きくのびをし、胸いっぱい息を吸った。息を吸うと共に、果てしなく拡がる孝策の眼の前の青色のなかで、小さく透明な光の渦が無数の羽虫のように舞い、そして何かが彼のなかですうっと遠ざかって行つた。彼は思わず眼を閉じて、しゃがみ込んだ。しゃがみ込んだ彼の臉の裏では、なお暫く、透明な光の粒の群れが、ゆっくりと輝きながらまわり続け、やがて薄暗いものが、その上をおおつた。

間もなく、軽いめまいから恢復した孝策は、今度は用心深くゆっくりとのびをしてから仕事にかかった。彼は庭の西南の隅の、応接間兼書齋の前あたりの草地を物色し、やがて程良い所を見はからつて、勢いよくシャベルを突き立てた。シャベルは、長雨で軟らかくなっている庭土のなかへ一気に潜つて、地面に立つた。

孝策は、突き立つたシャベルの前で、改めて体勢をととのえると、シャベルの柄を両手でしっかりと握り、下の縁に右足をかけ、足と手に精一杯の力をこめて、それを土のなか深く掘り下ろした。シャベルが勢いよく土中へ潜つて行くにつれ、雑草の根の切れて行く感触が、シャベルを握りしめる孝策の掌に、ぶつぶつと伝わってきた。

これ以上は入らぬ深さのところまでシャベルを掘り下げた孝策は、息をととのえる間もなく、

腕と足でシャベルをこじって土をゆるめ、それから、腰を低く落して、左手を支柱にし、右手でシャベルの柄の端を持ち、全身を使って土をゆっくりと掘り起した。シャベルは、鈍い、したたかな土の抵抗を伝えながら、じわじわと動いて行つたが、途中からそれが急に軽くなつたかと思うと、新鮮な黒土の層が孝策の眼の前でぱっくりと割れた。その勢いでシャベルから溢れた土が、ゴム草履をはいた足にこぼれかかり、足指の間にはさまって、湿っぽくざらつき、掘り出されたばかりの土の匂いが、慣れぬ運動に息をあえがせる孝策の胸いっぱい流れ込んだ。孝策の身体の下で、ふと、かすかに狂おしさのまじる感覚の喜びが動いた。掘り出され、盛り上つた黒土の塊からは、うつつらと湯気が立ちのほり、明るく軟らかな大気のなかへゆらぎ消えて行つた。

それから三十分ばかりの間、孝策は殆ど一心不乱にシャベルをふるって、かなり大きく深い穴を掘り上げた。底にたまつた土をかき出してみると、その下には、意外に滑らかでつややかな赤土の層が光っていた。それは、殆ど不安にかられるほどに鮮やかな色であつた。

木を植えかえるためには、赤土が見えるところまで掘り下げたのは、掘り過ぎであつたのかも知れないと、掘り上げた穴の縁に立つた孝策は思った。彼は、ふと思いついて、周囲に積み上つた黒土を砕いて穴の底を少し埋め、その赤土を見えないようにしておいてから、家の裏手にまわり、台所からゴミバケツを下げてきた。そして、野菜の切端や、インスタントラーメン

ソの余りがからみ合つて粘ついている台所ゴミをひとつかみ、手でとると、穴の底へ投げ込み、そのゴミもよくはこそげ落さぬ手でシャベルをとつて、底の土をかきませた。すると、台所ゴミのすえた臭いと、掘り起された土の匂いが、湿気でいっばいの空気のなかで混り合つて、あたりいっついに異様な臭いを挙げたが、孝策は、それを自分から進んで胸いっばいに吸い込むと、更にゴミを手にとり投げ込み、シャベルをとつて土をかぶせ、ゴミと土をかきませ、またゴミを投げ込み土をかぶせ、といったことをくりかえした。

生の台所ゴミが、木の移植に役立つのかどうか、孝策は全く知らなかった。だが、それを思いついた時、彼の手を止めるものは何もなかった。まるで意味のない遊びに耽る頑是ない子供のように、孝策は嬉々として自分の思いつきに身をまかせ、掘つた穴の三分の一ぐらいまでを、ゴミと土で埋めた。台所ゴミのこびりついた手の感触さえが、彼には楽しかった。

孝策が、今応接間の前に移そうとしている木は、庭の東南の隅にあるヒマラヤ杉だった。そのヒマラヤ杉は、三年ばかり前アパートからこの家に引越してきた時、せめて庭木の二、三本はと思つて頼んだ植木屋が、庭の中央近くに、投げやりに植えて行ったものだった。その頃は、植木いじりなど億劫でやったことのない孝策であったが、毎朝、朝食を摂りながら眺める二、三本の植木の位置が余りに無神経なので、ある時とうとう決心して、土曜日の帰り、デパートでシャベルを買つてきた。そして、その時、自分で植えかえた木が、結構枯れもしないで枝葉

を延ばして行くのを見たのが、三十代の半ばを過ぎかけていた彼の土いじりの始まりだった。

孝策はそれ以来、いい季節には、月に二、三度は、ゴム草履に古ズボン姿で庭土の上に下りるようになった。彼は、自分でも気づかぬうちに、土をいじることに夢中になっていた。彼は新しく買ってきた苗木や若木を植え、簡単な草花の種を蒔き、既に植わっている木を植えかえた。彼は植木や花のことは何も知らず、自己流に土をいじるばかりであったから、時折失敗して木を枯れさすことなどもあったが、彼自身としてはそれでも充分に楽しかった。土曜日の帰り、揺れる電車のなかで吊革につかまり、明日は雨が降らなければ、庭のあそこをこう直そうか、いや明日とは言わずに今日、まだ日があるうちに三十分でも跳で土の上を下りてみようかなどと考えるだけでも彼の週末は充実してきた。そういう時、佐室孝策の心は、男盛りの年齢にも似合わず、遠足前の小学生でもあるかのように、無邪気にときめいた。それは、数年前、どうしても家を建てる必要に迫られ、そのための経済的、心理的、苦勞に責めたてられていた頃には、まったく予期しなかつた喜びであつた。

穴を三分の一まで埋め終つた孝策は、東南の隅から掘り起した、自分の背より少し高いヒマラヤ杉を、根の土を落さぬよう気をつけて書齋の窓の前に持つてきて、用意の整つた穴に移し植えた。将来、枝が伸び葉が繁つても、書齋の軒にぶつからぬだけの間隔は、丁度ぎりぎりに空いているはずだった。彼は、さつき掘り上げたまわりの土を、根っ子と穴の間へ埋め、余つ

て盛り上った土をシャベルで叩いて固めた。そして彼は、盛り上ったヒマラヤ杉の根元の土に如露で水をかけると、その湿った土の上を、ゴム草履を脱ぎ捨てて跣になった足で一歩一歩踏み固めて行つた。遠くから、日曜日を遊び暮す子供たちの叫びが長く尾をひいて聞えてきた。

その時、不意に、殆ど狂暴な喜びが孝策の身体の底から突き上げてきた。俺の爺さんは、百姓だったんだ——。湿った土を踏む孝策の心に、いつもは少しも思い出さぬことが甦つた。俺の爺さんは、若い時から、いや子供の時から、こうやって跣に土を踏み、野や畑の匂いをかいて育ち、陽と共に起き、土にまみれて必死に耕し、夢も見ぬ疲れた眼りを眠り、結婚し、子供をつくり、喜び、悲しみ、苦しみ、そして死んだのだな。俺の爺さんは、土のなかから生れ、土のなかで生き、土のなかへ帰つたのだな。泥の溶け込んだ汗を肘で拭いながら、いつの間にかしゃがみ込んで、両手の掌で、ヒマラヤ杉の根元の湿った土を固め続ける佐室孝策のなかで、父親の少年時代に死んで彼自身は会つたこともない祖父の、単純で明確な生の姿が、そびえ立つた。その生の姿は、四十を眼の前にしている孝策を励まし、支えてくれるものでありながら、何処かまた、彼を不安にするものでもあつた。

「お父さん、泥遊びしているの？」

不意の言葉に驚いてふりむくと、娘の万里が立っていた。夢から突然呼び戻された思いで、とっさに答えの出ない孝策を、二年生になつたばかりの小さな万里は、暫くじつと見つめてい

たが、やがて、

「お母さんが、お茶が入りましたから、お飲みになりませんか」

と、まだやや舌足らずの口調で、言われた通りの言葉をくりかえしただけで、ヴェランダの方へ、ばたばたと大人の下駄を引きずって、駆けて行った。

あとに残された孝策は、ゆっくりと立ち上り、掌の土をヒマラヤ杉の幹にこすりつけて落した。そして、今一度、広い空をあおいだ。彼の見上げた空の青い輝きは、わずかに穏やかな午後の不透明な白を加えながらも、なお果てしなく拡がり、移り行く人々の営みの上で、永遠にその光を減じないかのようにであった。

第一章

1

梅雨の晴れ間は、まる一日と続かなかつた。月曜日の明け方から降り出した細かい雨は、降ったり止んだりしながら、殆どその週いっぱい、世界を霧のような湿気で包んだ。孝策は毎日、ワイシャツを汗でじっとりさせながら、バスと私鉄と地下鉄を乗り継ぎ、一時間余りかかつて、都心にある勤め先の信託銀行に通つた。

佐室孝策の生活は、外見はかなり単調なものであつた。彼は、大学を出て今の信託銀行に入り、二、三のポストを経験してから、自分で希望して本店の海外調査室にまわしてもらつた。